

第13回建築コンクール

公益社団法人愛知建築士会名古屋北支部主催

名古屋よろ建築

建築が「さまよう」とは?
人の移動とともに
さまようものもあれば、
土着してゆくものもある。

WANDERING

カタチを離れて思考や行為として迷いさまよい
どこかに向かっていくものもある。
いろんな「さまよい」を許容できる
フコロの深い作品を募集します。

ARCHITECTURE

公益社団法人

愛知建築士会 名古屋北支部

CONTENT

WANDERING
ARCHITECTURE



さまよう建築

シンポジウム	パネラー／審査員	04
	挨拶	05
	ナガオカケンメイ [デザイン活動家]	06
	河村 桃子 [とものつくる建築家]	11
	前田圭介 [建築家]	17
コンクール	最優秀賞	23
	優秀賞	24
	審査員賞	25
	佳作／公開審査総括	26
	後援／協賛企業	27

第13回 建築コンクール シンポジウム

さまよう建築

WANDERING ARCHITECTURE



パネラー／審査員


前田 圭介 建築家／株式会社 UID 代表取締役

故郷「広島県福山市」を拠点に国内外で様々な設計活動を行っている。内部と外部の自然をインタラクティブに取り込む建築は国内外で評価され、代表作品に「アトリエ・ビスクドール」で ARCASIA 建築賞ゴールドメダル (ASIA)、第 24 回 JIA 新人賞、日本建築学会作品選奨。2017 年には「福山本通・船町商店街アーケード改修プロジェクト - とおり町 Street garden -」でグッドデザイン賞 2017 金賞に輝いている。現在は、設計活動と共に近畿大学工学部教授を務める。


ナガオカケンメイ デザイン活動家／D&DEPARTMENT ディレクター

「ロングライフデザイン」をテーマにストアスタイルの活動体 D&DEPARTMENT PROJECT を創設。47 都道府県に 1 か所ずつ拠点をつくりながら、デザイン目線の旅行文化誌「d design travel」や日本初のデザイン物産ミュージアム「d47 MUSEUM」などを展開。物販・飲食・出版・観光などを通して、47 の「個性」と「息の長い、その土地らしいデザイン」を見直し、全国に向けて紹介する活動を行う。2013 毎日デザイン賞受賞。


河野 桃子 ともにつくる建築家／合同会社 つみき設計施工社 副代表

1983 年生まれ。スイス 2b architectes でのインターンシップを経て 2010 年京都大学大学院を卒業。現在 つみき設計施工社 を共同主宰。3 人娘の母。「ともにつくる」を理念に、住む人と作る人が、ともにつくり、学び合う「参加型リノベーション」を展開。関わるすべての人で、同じ喜びを分かち合える、建築の仕事を目指しています。著書「ともにつくる DIY ワークショップ」。2007 年 せんだいデザインリーグ日本一受賞。住まい手参加型設計手法を提案した 2009 年 SD レビューにて鹿島賞受賞。

挨拶

こんにちは。前田圭介です。今年も審査委員長という役目を仰せつかったのですが、あまり委員長的な意識を持たず、この時間を楽しみたいと思います。コロナ禍で応募して下さった皆さんとお会いできないのは残念ですが、できるだけ今回の「さまよう建築」というテーマを深掘しながら、楽しんで行けたらと思います。よろしくお願いします。

ナガオカケンメイです。今、ここ名古屋にいるのですが、実は知多半島の真ん中、阿久比町というところで育ちました。今日も阿久比町から車で 40 分ぐらいで来ました。今、4 拠点生活をしています。沖縄、愛知県、東京、静岡の 4 拠点をまさにさまよっております。そのさまよう観点で審査が楽しくできたらと思います。よろしくお願いします。

つみき設計施工社の河野桃子と申します。今日は 80 作品という多数の応募のある審査ということで、大変楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。



ナガオカケンメイ氏

ナガオカです。よろしくお願ひします。僕は生まれは北海道で、育ちは愛知県知多郡阿久比町という知多半島の真ん中の、人口3万人弱ぐらいの町です。そこから大都市東京に出ていきました。田舎がいやだったのですが、今56歳になって知多半島に戻ってまいりました。そのような観点からいろいろな作品を審査できる事をすごく嬉しく思っています。

4拠点生活

東京・30年以上・生活
静岡・本籍地・定住欲 非生活
愛知・ふるさと・絶対的
沖縄・不明の癒し・救い

まず「さまよう建築」というキーワードで思い浮かぶポイントは、4拠点生活をしているということです。本当は富山を入れて5拠点生活にしたかったんですが、なかなか文化度の高い田舎に行けば行くほどプライドも高いし、困ってらっしゃらないので物件を貸していただけないと。例えばよそ者に対して開いている、栃木県の益子町みたいな所と違ってやっぱり閉じているからこそ、その独特な文化、風土を育むという仕組みがあります。

東京に30年以上住んでいまして、東京が一番偉かった時代を生きた、都会慣れしちゃった人間としては、やはりこれから田舎の時代になっていく中で、田舎で活動をするとしたらばどうするか?ということを考えています。今、東京依存型の生活を30年以上して、社員100人ぐらいの会社で、本社も東京にあります。そのあと、縁もゆかりも無い静岡に住宅を建てました。これは、定住欲というのがあります。東京という土地には憧れていましたが、東京に永住したいとはこれっぽっちも思いません

でした。実際自分の事務所も渋谷のヒカリエという駅ビルの中にあるのですが、そこから東神田という、ちょっと東の方、東京のはずれ、浅草の方に移動したぐらいです。やっぱり東京に居ながらも田舎に対する気持ちがあるということで、すごい田舎の静岡県富士宮市というところに定住したいという気持ちで住民票を移したのですが、実際これが年に1ヶ月もいることができない…。いわゆる別荘のような扱いになってしまって、非生活っていうキーワードが出てきました。

愛知県はふるさとなので、これはもう絶対的です。この年になってふるさとってというのはやっぱり絶対的だなということで、今年から約200日ぐらいを愛知県で過ごすという感じになりました。

最後は沖縄なんですけど、これはもう救いというか癒しですね。東京にずっといるので、心も病んできます。やっぱり沖縄に救いを求めたんですね。去年は220日沖縄にいました。今年からふるさと愛知県への恩返しということで、自分のお店を作りまして、そこにほぼいるので、沖縄は3ヶ月に1回、10日間ぐらい、年40日ぐらいを、救いを求めて暮らし始めたんです。

そんな感じでさまよっています。



これは沖縄の家です。さまようというテーマで最初思っていたのは、4拠点生活ということで、その4拠点生活には象徴的な120cm径のテーブルがあります。これは僕のお店オリジナルのテーブルです。これが必ずあります。なので、僕の中では、さまよい、たどり着くのは建築というよりも、この「テーブル」。テーブルにたどり着くことで自分がすごく癒しというか、心の安定みたいなものを感じ

ます。そのテーブルからテーブルにずっと移動しているということで、僕の中では「さまよう建築」というと、このテーブルが建築的な役割になっているんじゃないかなと思います。



これは東京です。椅子はYチェアで違いますが、東京にも同じテーブルがあります。ここには、妻がおりますので、妻と一緒に過ごすということで、このテーブルでごはんを食べたりしています。だいたい年間100日も東京にいますが、そんな感じでこのテーブルで過ごします。



せっかくなので愛知県のローカルの地名を。愛知県知多郡阿久比町の横にある半田市というところ。ミツカン酢というお酢で有名な日本企業があります。その本社がある場所なんです。そこのアパートです。そこにもやっぱり同じテーブルがあって、ここにたどり着くということはあのテーブルにたどり着くということで、これも自分の中では建築的要素かなと思っています。



これはですね、ちょっと違うのですが、三重県に自分のお店が出来まして、VISONというすごく大きな商業施設の中にあります。そのお店の上に6部屋か8部屋ゲストルームがあり、そのうちの1つです。当然、自分が宿泊施設を作るということを考えた時に、このテーブルは不可欠なので、やっぱり皆さんにこのテーブルにたどり着いてほしいという気持ちと、自分もやっぱり利用するので、このテーブルはなくてはならない建築的な要素かなと思います。

さまよう＝変わり続けられる

さまようというキーワードで次に思いついたのが、「変わり続けられる」という事です。

僕は東京にずっといて、定住するつもりでいました。けれども、だんだんそうではないということになって静岡にお家を建てたり、2拠点3拠点4拠点生活を始めたりました。自分が変わり続けるために定住してはいけないという思いからです。

そういう意味で建築というのは大地に固定されたものもそ

うですが、小屋みたいに基礎を打たずに移動できるみたいな事もとても重要になってきます。僕は建築が好きなのですが、やっぱり建築はどっしりとその土地に根付いてほしいんです。けれども一方で人間がさまよう。

僕は移動のほとんど100%が車です。沖縄は行けないのですが、あさっても大牟田という九州の街に16時間くらいかけて行きます。そういった意味では、さまよう機能として車も建築物的なのかなと思っています。変わり続けられるという事です。



ちょっと余談ですが、僕は今プラスチックにハマっていて、普段、持ち歩いているぐらいです。僕はグラフィックデザイナーが本業ですが、プロダクトとか生活用品のお店をやっています。プラスチックは誰からも愛されることなく、今や使い捨てみたいなことになっています。食器棚に丁寧に取まらない、本当にさまよう、さまよえる素材であり、本当に可哀想な素材です。でもこれはプラスチックメーカー大手と一緒にロングライフなプラスチックプロジェクトということで“プラスチックも一生モノ”になるんじゃないかということで開発したものです。これを一生使って行こうというプロジェクトです。素材建材みたいなものも今回のテーマ、さまようということが何か言えるんじゃないかなと思っています。



建築をつくる時に使われる物の中で、さまよいつける物であると思うんです。コンクリートを打つ型枠とか、そういうものにも何か新しい着眼点ができたらいいなと思っています。こういうプロジェクトを今やっています。もしよかったら皆さん検索して見に来てください。



これは、BRUTUSとかいろんなファッション雑誌を30誌ぐらい、建築の雑誌だったら住むとか新建築とか商店建築など、そういうものを20年間、毎月毎月47都道府県にバラバラにするというのが趣味で、47都道府県スクラップしたものが、この渋谷のヒカリエにあります。これはいつか自分が旅をする時に、このファイルを持ってその県に行こうと。そうすると自分がいいなと思ったところが、例えばCasa BRUTUSの本当に切り抜きみたいなものが愛知県なら愛知県のところに貼ってあるみたいなファイルです。そんなことをして、さまよう準備を実はしていたって言うことかなと思いました。



こんなトラベル誌を47都道府県分作っています。今、29県完成して、あと13年ぐらいかけて完成させるんです。たぶん僕が老後70歳ぐらいになった時にさまよう一つのガイドということで、何かちょっとヒントになったらなあと思います。

最後に。

変わらない・変わり続ける
↓
ブランド

僕はブランディングの仕事をやっていて気づくんです。ロングセラー、ロングライフなものを持っている企業というのは変わらないと変わり続けるという2つを持っている。僕はちょうど1965年生まれでDCブランドブームというファッションブランドのブームがあったんです。今からたぶん30年ぐらい前です。その頃すごく出てきたブランドのほとんどがもうこの世の中になくなってます。彼らは何でいなくなったかという、新しいものだけをつくっていたからです。

今残っている、ギャルソンとかルイ・ヴィトンとかシャネルは変わらないものと変わり続けるもの両方並走することが

できていたから残っていく事が出来た。そういうものを“ブランド”って呼ぶんじゃないかなと。さまようというのはブランドの一つの側面で、僕は、その土地やその建築やその会社や個人が、さまようということの一つの重要なキーワードなんじゃないかなと。審査の観点でもそう思っています。

以上です。ありがとうございました。

前田 面白い話を色々伺いました。自分はどうしても建築を軸に考えてしまいますが、先程のプラスチックという素材について、建築においても、例えば石油革命(エネルギー革命)で60年70年代に色々な建材が一下子出てきて、今の日常にもいろいろな目に触れるものになっていますが、それ以前はそういうものがなかったから、工夫して使っていたと。新しいものができる、それをどういう風に使うかというのは、最初はどうもできないけれど、少し時間が経つと、そこに「デザイン」という人の手元に届けるような「翻訳」が入ってきます。はじめのうちは悪い面だけが見えがちですが、成熟してくると、その良さが見えてくるんじゃないかと。これからの時代は情報革命、ITとかAIとか、使わされているというか、人間の方が“さまよわされている”様なイメージがあります。しかし時間を経ていくと人間の方がうまくフィットするような扱い方ができるのではないかなとも感じました。

河野 すごく面白いなと思いながら見ていました。例えばブランドの話で、今残っているブランドというのは、変わらないものと、変わり続けているものと、どちらも持っている。変わり続けているだけのブランドは、もう消えてなくなってしまった。というようなお話がすごく面白いなと思いました。多分、人もそうだと思うんですが、旅をしたり、いろんな場所に行ったり、さまようって事をすごくしていきたいというか、さまよう事なくしては、あまり楽しく生きられないかなと思うんです。一方で、その中でも変わらない、落ち着ける場所があったりということが大切なかなということ、そのブランドという観点からお話しされていたのがすごく面白いなと思いました。

尾関 河野さんご自身はいろんな場所にお住まいだったのですか。

河野 そうですね。私はもともとは札幌の出身なんです。大学で京都に行って、そこから学生時代にインターンシップでスイスに行き、今は千葉県の市川市という何の縁もゆかりもなかったような場所にいます。最近はずっと落ち着いてきましたが、だいぶさまよったとは思っています。(笑)

尾関 ケンメイさんのさまようとはニュアンスが違いますね。

河野 そうですね。やっぱり学生の頃は新しいものを見たいという気持ちだったり、ヨーロッパとか海外への憧れがすごく強かったので、とにかくヨーロッパに住んでみたいという思いを持っていました。英語もドイツ語もフランス語もできなかったんですが、とにかく海外に行くぞ!というのを決めて、スイスのローザンヌという街に住んだことがあるんです。こんな感じで冒険を求めてと言うか、さまようってことは、本来、人が欲していることでもあるのかなという風に思ったりしています。

前田 ナガオカさんのテーブルを軸にさまよっているっていうのは結構面白いなと思いました。何か落ち着くアイテムとかですかね。

ナガオカ そうですね。最初は建築が好きだったので、例えば旅行するにしても建築の空間とかロケーションみたいなものを目掛けて旅をしていたんですが、だんだんお風呂だけとか、お風呂からお風呂に移動するみたいな、なんかそういう感覚になってきた時に、旅先の旅館の選び方がお風呂で選んでいるみたいなことになっていくのと一緒でやっぱり何かをめぐらしている。何か点のような場所が欲しいんだなと思いました。

尾関 そのテーブルに対する、執着というか愛着があるわけですね。

ナガオカ たぶん皆さんそれぞれあると思うんです。それがソファだったり畳の上だったり、何か絶対あると思うんですよね。

それは建築のレベルの大きさというよりは、家具に近いような。もしかしら僕みたいなこのマグカップみたいな小さなものかもしれない。さまようということは、やっぱりどこかをめぐらして点を渡り歩いたり、面をめぐらしたりというのがあるんじゃないかなと思います。自分のスケール感を感じられる物が、それがテーブルだとしたら、そこに逃げ込みたいという事かもしれないですね。



尾関 冒頭のお話で文化度の高いまちは“閉じている”というお話がありました。

ナガオカ そういう傾向にあるという事ですね。FM 京都で京都の人をゲストに呼んで、長く続けている理由を説明してもらおうという変わったラジオ番組をレギュラーでやっているんです。皆さんいかに“閉じるか”という事、閉じることによって自分たちのベースを確保した上で商売をするかということを考えていらっしゃいます。一見さんお断りに代表される「いけず(意地悪)」な社会とよく言われますが、自分たちは継続をするために、まず自分たちのベースや環境やスタイルみたいなものを、不特定多数のお客様や、いろいろな人がいろいろなことを言うことから守るか、そういう意味で文化的な地域はある一定の閉じ方があるなと思います。

尾関 そこにケンメイさんのようにさまよっている人が入っていくとすると入りにくいわけですか？

ナガオカ そうです。なので僕はアパートを借りています。その土地にとってのよそ者は、その土地に何かしらの部屋や自分のスペースを確保しているかどうかで位が上がるんです。位が上がるというのは変ですが、単純なよそ者ではなくると。あいつは年のうち半年くらいは住んでいる。住んでいるからこそできることはいっぱいあるな。ビジネスホテルもいいですが、やっぱり自分で部屋を場所を借りて何かするってことはとっても重要なんじゃないかなと思います。

河野桃子氏

「さまよう建築」というテーマで5つのプロジェクトを紹介していきながら、私自身がこれまで考えてきたこと、実践してきたことを紹介していきたいと思います。

5つのプロジェクトのうち最初の2つが「空間をさまよう」というコンセプトのプロジェクト、次の2つが「アイデアがさまよう」というプロジェクト。最後に「海をさまよう」という5つのプロジェクトを紹介していきたいと思います。



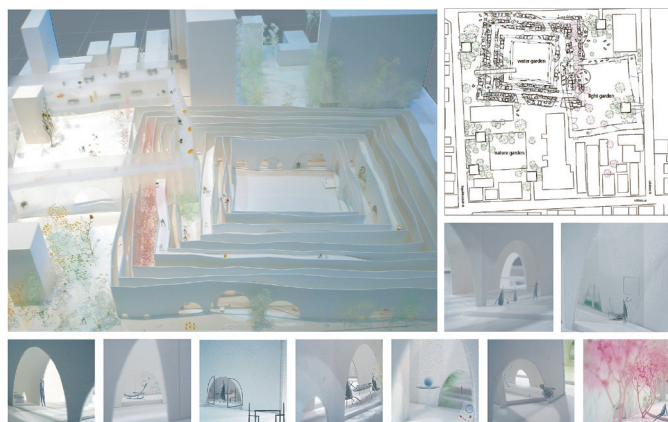
まず1つ目が Rolex Learning Center です。これはスイスのローザンヌにあるとても有名な建築だと思います。SANAAの手がけた作品です。私は学生の頃に1年間休学して、スイスのローザンヌの建築設計事務所です。その当時2008年ですかね? 当時はまだ建設中でした。右上の写真がその時の写真です。その後2012年に、ここを訪れる機会があった時には建物が完成していました。不陸のある広々とした空間の中で、人々が自由に居場所を見つけて過ごしたり、パソコンを広げたりおしゃべりをしたりと、そういうコンセプトの建築だと思うんですが、本当にそういうことが起こっていました。

私たちが学生の頃は、すごく SANAA への憧れをみんな抱いていて、私も大きな影響を受けた部分があるかなと思っています。まさに“さまようことができる”いい建築の例かなと思っています。

次の空間をさまようプロジェクトは私の卒業設計です。「kyabetsu」というちょっとふざけたタイトルの卒業設計です。大小様々な大きさのアーチ型の開口がある長い壁が何層にも重なっていて、その隙間に住空間や、ちょっと路地のよう



2. 空間をさまよう② kyabetsu - 卒業設計 - (河野(藤田)桃子)



な空間があるというような、そういう集合住宅です。なので、住んでいる人だけじゃなくて、外から来た人も路地のような空間をさまよいながら、そこに住んでいる人たちの暮らしぶりが見えたりして楽しいというような集合住宅です。その穴の空いている壁が重なっている様子が虫食いのキャベツの葉っぱに似ているかなということで、こういうタイトルにしました。

この卒業設計の頃に考えていたことが2つありました。

まず1つは“さまよい歩いて楽しい”ということ。2つ目が“住む人が作りながら育てていったり作っていきっていくような空間がいいな”ということです。

建物は出来た時が最高にいいじゃなくて、だんだん住む人によって手が加えられたり、変化して行ったり、そういう風に成長していくような建築を作っていけないかなということ、あの頃はすごく考えていました。

次に手掛けたプロジェクトがこちらです。

これは「アイデアがさまよう」というコンセプトで語ることができるかなと思うプロジェクトです。これは私がスイスに行った頃に出会ったケリーという女の子と、私の夫になる人と一緒に計画をしたペルーのお家です。

左下がそのケリーの家族です。この家族がペルーに遊びに行った時にいつもおじさんのうちに泊まっているんです。

それが右側の2階建ての白い建物です。このおじさんのお家の上に、彼女たちが遊びに行った時に過ごすお家を増築しようというプロジェクトでした。

この計画をするにあたっていろいろ面白いお話を色々聞きました。まずペルーでは家は自分たちで作るのが当たり前。だから家を作るぞ!となったら家族みんなでレンガを運んだり、ペンキを塗ったりしながら、少しずつ時間をかけて作っていくのが当たり前というような感じらしいです。だからというのものもあるのかもしれないですが、ベランダを作る時にあまり出っ張って作ると落ちた時に人に迷惑がかかるとか、ベランダは出っ張った設計にしないでおこうとか、インターネットの配線は外に出ていると盗まれてしまうから、中に入れようとか、ちょっと日本では考えられないような、色んな面白いお話を聞きながら進めたプロジェクトでした。

どんな住宅にしようかっていうことを話して考えていくにあたって、家族にヒアリングをしたんですが、すごく住ま

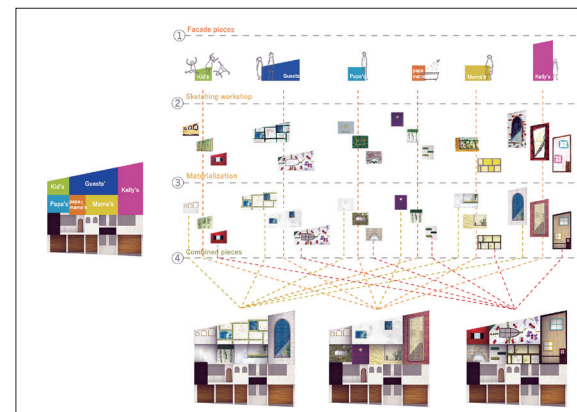
3. アイディアがさまよう①

Casa en Peru - ペルーの住宅増築計画 - (河野直、桃子, Kelly Finger)



いへの希望とかアイデアが溢れ出てきました。

そういった家族のたくさんのアイデアを一旦すべて形にすることができないかなということも思いついたプロセスが右側の図になります。



ちょっとアップした画像を次のページで。

元々ある2階建ての建物もなんとなく、見方によっては四角を組み合わせていったようなデザインになっているんですが、新しく増築する部分についても、6つのパーツに分けて考えました。ピンクの部分がケリーの部屋で黄色の部分がママの部屋でオレンジの部分がバスルームです。青い部分がゲストルームっていうのが私たちが遊びに行った時に泊まれる場所で水色の部分がパパの部屋で黄緑色の部分が親戚の子供たちがダンスをするステージです。まずその6つのパーツに分けます。その6つのパーツに思い思いにスケッチをもらうというワークショップを行いました。好きな色とかイメージを全部このスケッチに自由を書いてもらって、次の3番目のプロセスとして、そこに素材を当てがって、少し建築として成り立つようにデザインをし直しました。それを組み合わせたもので、ファサードを構成していくような作り方を考えました。

この組合せを、何百というパターンを作って、これを見ながら家族であれがいいこれがいいというディスカッションできるようなやり方を考えました。この住宅の設計を通じて“住む人と一緒につくっていく”というのは価値のあることだということを感じました。それはすごく私たちのやっていきたいことだということを確認したプロジェクトでした。その後独立した今でも一番大切にしていることです。

次に「アイデアがさまよう」の2つ目のプロジェクトです。先ほどのペルーのプロジェクトは、増

築に使うための資金をおじさんがレストランを作るのに使ってしまったので、またお金が貯まるまで待つことになったよという連絡を頂きました。

でもいつかこのやり方をどこかでやりたいと思っていたんですけど、それをする時が来たというのが次のプロジェクトです。

私たちは2010年につみ木設計施工社という会社を立ち上げました。そこで「ともにつくる」ということを合言葉にして、お家とかお店を作ってきました。今年で12年目になります。もともとなぜ市川で始めたかと言うと、一緒に仕事を始めた大工さんが市川出身の方だったっていうのがきっかけなんです。私たちは出身も市川ではないし、ここで過ごしたこともなかったので、本当に友達もいないし、仲間もいないし、仕事も無いしというような、スタートを切ったわけです。参加型リノベーションというのをやっていく中で、関わる人が増えて、一緒にお家作りとかお店作りを通して沢山の仲間たちができてきました。そして、ある時から仕事をするエリアを自分たちの住む街とその周辺に絞っていくっていう風に方針を固めました。それはなぜか?と言うと、仕事が楽になるという事もあるのですが、もっと大きなモチベーションとして“自分たちの住むまちを自分たちの手で楽しくしていきたい”という事がありました。そのようにして、市川市内で50件くらいの場所を参加型リノベーションを通じて作ってきました。

そしてたくさんの“ともにつくる”をしていく中で仲間がで

4. アイディアがさまよう②

市川にぶとプロジェクト - 整骨院 + コミュニティスペース - (つみ木設計施工社)



Player ① ART GANG PIPPI



Player ② GANG PIPPI MAMAS



きました。

この仲間たちと是非一緒にやりたいと思っているのが「市川こごとプロジェクト」です。ここは私の住んでいるマンションから5分のところにあります。すごく近所です。

たくさん仲間ができて、是非参加してもらいたいと思っている仲間の一部がどういふ方々かと言うと、「ART GANG PIPPI」ということもアート集団がいます。私たちの娘たちも参加しているんですが、子供達と一緒に市川の手作り市で使うテントをデザインするというワークショップを行いました。子供たちに自由に絵を描いてもらって、その絵を丸く切り取って、それを組み合わせてテントのデザインにするというワークショップです。すごく元気いっぱい素敵なテントかできあがりました。

Player ③ ご近所さん



Player ④ 協働してきた仲間たち



エネルギーあふれる「ART GANG PIPPI」のメンバーですが、そのママ達「GANG PIPPI MAMAS」も本当にエネルギーの半端ない人たちで、この人たちと先日アートなパーティーテーブルを作ろうというイベントをしました。それがこちらの写真です。一見テキスタイルのように見える綺麗な“面”ですが、1つ1つ手作りの“すごく美味しいごちそう”でできています。例えば左下のちょっとカラフルなドットは野菜で着色されたフムスだったり、イチゴのサンドイッチフルーツサンドだったり。上の点々みたいな感じになっているのは手作りのブリッシーニを並べたものであ

たり、野菜のテリーヌだったりします。このように1つ1つのすごく美味しいものを並べたアートを作ったというのが、先月このママ達と行ったプロジェクトです。

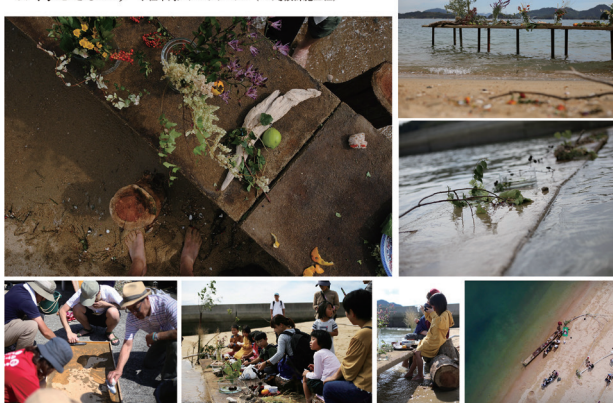
実はこれは、市川市の商店街に期間限定でアーティストの、のれんを飾ろうというイベントが3月にあるんですが、そこでのれんの1枚にしてもらう予定になっているものです。

この「市川こごとプロジェクト」をやるにあたって、もう欠かせないメンバーがご近所さんです。

私たちの住むマンションの中で、すごくいいコミュニティができていて、そのマンションの中でも何件かリノベーションさせてもらったお家があるんです。じゃあ誰々さん家でペンキ塗るから集まってもらえませんか?と声をかけると、大人も子供も集まってきて、みんなでペンキを塗ったりワイワイやったりで、最後はお酒を飲んで打ち上げをするという。そういう良いコミュニティがあります。そのご近所さんたちには是非、この新しいプロジェクトに関わってほしいなと思っています。

それから、その下に協働してきた仲間たちというのがありますが、お家もそうですし、店舗と住宅半々ぐらいで今までやってきたんです。例えばお店を作るとなった場合、その店主さんだけではなく、そのお店を応援したい人とかも集まってきて、一緒にお店作りをするというような、作ることで広がってきた人の輪があります。そういった人たちもぜひ巻き込んでいきたいなと思っています。

5. 海をさまよう 小佐木島ダイニングテーブル (つみぎ設計施工社)



はい、最後です。

「海をさまよう」というガラッと違うプロジェクトです。最初「さまよう建築」というテーマを聞いた時に、あ、これが一番しっくり来るんじゃないかなと思いました。こちらのプロジェクトは、小佐木島という、前田さんが拠点とされている福山のすごく近くにある瀬戸内海の小さな島です。人口数名のすごく小さな島なんですが、この島で行ったプロジェクトです。地元の土を使って左官職人さんに指導してもらいながら、土のテーブルを作りました。その土のテーブルの上におにぎりを食べるというイベントをしました。

おにぎり食べるんですが、海辺の水際にテーブルがあり、パーティーが終わる頃にちょうど満潮を迎えるようになっていて、満潮を迎えたテーブルと植物達は“海に流されさまよっていく”という、楽しい美しいプロジェクトでした。これは2020年に行われる予定だった広島トリエンナーレのイベントとして、何かアートイベントしてもらえませんか?という依頼を頂いた時に行ったイベントでした。

以上です。

前田 ベルーの人は自分たちで作るというのがすごいですね。ベルーの人はみんな建築が作れるというか、考えながら手と頭を動かして作っていくって。そんな素敵な文化が日本もあるといいなと感じました。それは職種として建築関係の人も多いということですかね。

河野 ケリーの家族はスイスに住んでいるのですが、お父さんはスイスでプロの大工さんをしています。多分この家を建てるとなったら、そのお父さんの指導のもとみんな動くというような感じになるだろうと思います。結構建設途中の鉄筋が飛び出ているような風景が見られるようなんです。そんな感じでちょっと時間をかけてみんなで作っていくというような感じのようです。

前田 そういう一連の過程の面白さが元になって、今の事務所のスタンスになっているのですか?

河野 そうですね。私自身もずっと設計をやってきて、建物のことか建築のことを考えるのも、作っていくのもすごく面白いことだし、このおもしろいことを、関わる人でみんなやっていけるといいなというのをすごく思っていたので、それを実践しているというか、今に繋がっている部分があるかなと思います。

前田 すごく幅広く、人の巻き込み方がすごいなと感じました。

尾関 みんなで作るって言うのは簡単ですが、巻き込んでそれを継続するって言うところまではなかなか難しい。しかも同じマンションの住人が、みんないいねって関わるのは素晴らしいことですね。

河野 やっぱり難しいというか、失敗してきた部分とかも色々



とあるんですが、やっぱり一緒に作るっていいことがたくさんあって、住む人にとっては、自分の空間がどういう風にできていくのか、誰がどういう風に作っていくのかってこともよくわかるし、より大切なものになるっていいことでもあります。職人さんにとっても、こういう人のた



めにやっているんだということが分かるいい機会になったり、いいことがたくさんあって幸せにする、上手にできればそういうことかなという風に思いながらやっています。

尾関 ケンメイさんもお店づくりをする時には社員総出でやられていますよね?それも“ともに作る”にあたるんでしょうか。

ナガオカ やっぱ大きなプロジェクトになればなるほど、予算があってスケジュールがあって、それを運用する人たちもいて、受け取った建築をどうやって使っていくかっていうタイムスケジュールがありますが、時間軸を外して行けば行くほど楽しくなっていくんだと。多分みんなで作るって本当におっしゃる通り、現場の人とか運用する人たちにとってはもう早く作ってくれ、予算通りのちゃんとやってくれて話なんだろうと思うんですが、建築ってやはりそこが無くなっていくと楽しくなっていくものなんだと感じました。

尾関 非常に楽しそうですね。

ナガオカ 楽しそうな一方でやっぱりあのリアルな実情もあるので、それをちゃんとバランス取ってやってらっしゃるところが素晴らしいですね。

尾関 ケンメイさんの作られるものは、一緒に作る、作り手と一緒にその商品を開発していくというのは、“ともに作る”と近いものあるんですか。

ナガオカ ありますけどね。ちょっと僕の仕事じゃないんですが、長野に ReBuilding Center JAPAN というのを立ち上げた方がいて、その方は自分のまちの解体されてしま

う建築物のパーツをレスキューという呼び方で回収して、その部材をホームセンター状態でまた販売して、街の人がリノベーションする時にそこからまた使うという、つまり“建材がさまよった”上、また集まって、そこで買う状態を作ることによって、まちの様子がそのまま継承されるというような事にすごく似ているなあ。時間を取っ払って、自分たちでやる、楽しい様子を作るというのもそうですが、解体する建築は一刻も早く取り壊して、一刻も早く更地にして次のプロジェクトを進めないといけない。その中で、これは必要、これは必要じゃないっていうのをコンクリートとかいろんなものを剥

がしながら拾い上げていくというのは、すごく大変な作業ですよね。だから建築的な時間軸じゃない時間軸でやられているのかなと。そういう話を今ちょっと思い出しながら聞いていました。

尾関 巻き込んでいく上ではどういうところがポイントなんですかね?やはり楽しくないと一緒について来てくれないですよね。

河野 2010年から私たちはこういうことをしたいということを言い始めてやっていたんですが、その当時はちょっとどこに面白さや良さがあるのか?時間もかかるし、何がいいのかよくわからないという風に、いまいち理解されなかったんです。ですが、今はDIYとかがすごく流行ってきていたり、セルフリノベみたいな言葉とかも出てくるようになってようやく、時間とかそういうこと超えた価値が若い人に伝わるようになってきたかなというのはあります。

尾関 時間軸を超えた価値という事ですかね。これは前回のねちっこい建築にもつながるんですが、さまよいなながらも絶妙なテーマの継続性ですね。大事な要素はつながっているんですね。ありがとうございました。

前田圭介氏

「さまよう建築」という事で、建築をやっていると、設計する側の自立的なところ、それだけでは成り立たないので他律的なところが同時に共存しながら、収束したり、拡散したりを繰り返して物ができ上がっていくような気がします。

例年5枚と言われながら、たくさん持ってきて喋っていたんですが、今日は5枚でちゃんとまとめてきました。自分が作ったもので、「さまよう建築」というのを見直してみました。

アトリエ・ビスドール (2009)



さまよいるような浮遊する建築

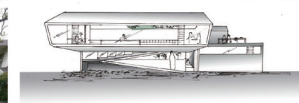


敷地周辺に広がる緑地

第13回建築コンクール さまよう建築



アトリエを見る



初期案からさまよひ、現在のカタチに至る

これは13年前ぐらいですかね?自分のターニングポイントになった住宅兼アトリエの建築です。出来上がった建築は「境界をさまよう」というか境界の部分消失させるようなことによって、街と住まいを繋げるということをやっています。そこに至る以前は右下のスケッチがありますが、人形作家の奥様のアトリエがあって、生徒さんもいたので駐車場やそういったことをある程度そのまま解釈しながら作っていたんです。プレゼンが終わって設計も進めていたのですが、改めてこの敷地周辺を、さまよって歩いていると敷地の境界に緑を植えている住宅が多かったんです。ただ道路と民地の境界にはブロック塀なるものがあった、すごく緑豊かなんだけど境界が明確化しすぎて、どこか窮屈な感じがし

ていました。プライバシーやセキュリティといった塀などの機能をゆるやかに満たしつつ、まちと繋げられるようなことができるというの。と考えていました。最終的に建築を再提案しました。お施主さんには、また新しい案を出して、1週間ぐらいさまよってもらって、こっちの方がいいですねという



事で理解していただいて、でき上がりました。少し時間があつたことが良かったのですが、建築を作る上で、その敷地の中だけではなく、当然周辺の余条件とか色々あるので歩きまようことによる気付きから展開して出来た建築というところです。

2階にはエステと学習塾が店子として話が進んでいました。しかし、こういった建物はテナントがかなりさまよっていきものです。その後学習塾が撤退して、オーナーから依頼があり、私たちの事務所が入らせていただくこととなりました。その後エステも数年経って撤退されたので、

森×hako (2009)

第13回建築コンクール さまよう建築



外観

内観

テナントが移り変わる

鳥が賑々とさまよいながら暮らす

今回は私たちがそこを借りてギャラリーとして、いろんな地元の作家さん呼んで、定期的な催しをギャラリーで開催しています。その作家さんによってはワークショップをやったりするので、うちの事務所の所員も参加したり、一般の人も参加したりします。イベントに応じて人が集まったり、いない時は打合せの場所として私たちが使ったり、

これは活動拠点の福山市にあるテナントビルで、うちの事務所も入らせていただいています。元々設計依頼があつた時は施主と工務店の設計施工で、全部図面もできていたんです。1階の歯科医院の院長が中学校の同級生だったので内装をやってほしいと依頼があり、図面を見せてもらったのですが、建築が良くないからあまり流行らないと思うよという話をしました。オーナーに会わせていただいて、設計をやり直す提案をさせて頂きました。なかなかこの

地域で建築に価値があるとか、そういう理解があるクライアントは非常に少ないです。当然オーナーは建築に何か希望は特に見だしてなくて、事業収支が合えば良いだけ。よってそのオーナーと長い時間一緒にさまよいながら、ようやく理解をしていただいて、このビルを設計させて頂きました。

りと、テナントがさまよることによっていろいろな使い方が生まれています。もう1つはランドスケープとして植物を植えてあるので、人間だけではなく、ヒヨドリが飛んできて、巣を作ったりと、動植物と一緒にさまよいながら今年で12年目を迎えています。そういった経年変化も楽しみながら過ごしている場所です。

高原誠吉食堂 (2016)

第13回建築コンクール さまよう建築



明治・大正・昭和の時代をさまよい、増改築を繰り返しながら現在に至る

内観 (改修前)

外観 (改修前)

この地域で建築に価値があるとか、そういう理解があるクライアントは非常に少ないです。当然オーナーは建築に何か希望は特に見だしてなくて、事業収支が合えば良いだけ。よってそのオーナーと長い時間一緒にさまよいながら、ようやく理解をしていただいて、このビルを設計させて頂きました。

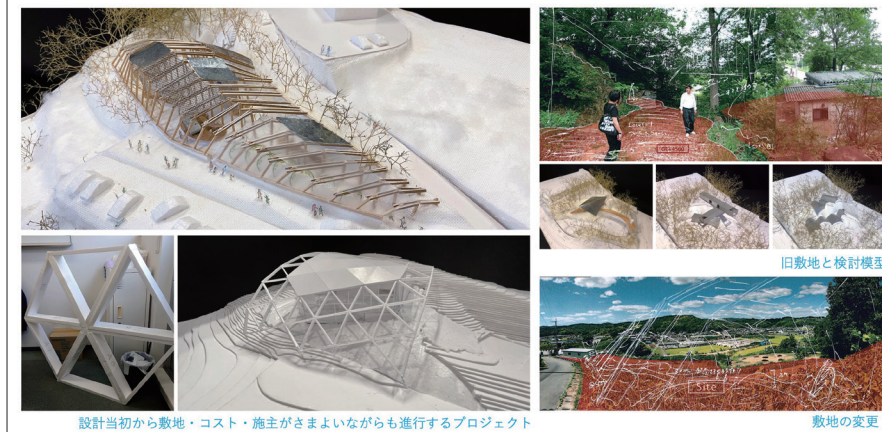
尾道の高原誠吉食堂という創作割烹のお店です。依頼があつた時はよくある本屋さんというお店の外観でした。内部は写真のような感じでした。リノベーションなので既存の躯体を調べようということで、事務所の所員と、オープンデスクで来ていた学生たちと表面のプラスターボードを解体していくと、鉄骨造だと思っていた躯体がかなり古い木造だということが分かってきました。さらに小屋裏へ上がると棟札が出てきて、明治、大正、昭和と、いろんな時間をさまよった建築であるということが分かってきました。その中で最終的に平成時代に全面プラスターボードで覆われ、鉄骨で無理やり補強され、普通の空間になっていたということです。であれば、その素地の部分を出してあげようということで、時間を少し戻しながら、新たな空間に変化させていこうということになりました。鉄骨やプラスターボードといった部材は全部取り払い、構造的な補強を施してあげました。また、求められた必要な面積に対して結構床面積が大きかったので、吹抜けなどの減築を行い、明治時代に建てられた骨組みをできるだけ見せてあげながら作ったプロジェクトです。これから先もまた令和の時間をさまよいながら変化していく建物になるんじゃないかと思っています。



地から始まったプロジェクトです。そこでできる建築の可能性をいろいろとスタディーしていた矢先に、施主が迷って違う敷地を最終的に設定されました。それが右下の敷地です。そこは一帯に温室が建てられていてあまり見たことのない特別な風景でした。そこで温室に着目しながらこの場所ならではの建築を考えていきました。少しバラック的な温室の汎用材で構成された即物的な取り合わせを踏襲したような大らかな骨格を持つ道の駅的な建築が望ましいと思いました。コスト的にもかなり制約があつて、紆余曲折しながらようやく着工を迎えました。最初は上のような形式で計画していたのですが、コ

岡山温室ミュージアム (MoMO) (2022)

第13回建築コンクール さまよう建築



設計当初から敷地・コスト・施主がさまよいながらも進行するプロジェクト

旧敷地と検討模型

敷地の変更

次は今やっている岡山の桃農家の方が運営する、この場所のフルーツを扱ったカフェプロジェクトです。これは「施主がさまよう」と。今日施主が聞いていたらちょっと怒られそうなんですけど…。木々が多い森のような敷

地の兼ね合いや施主のいろいろな状況でさまよいつつ、建てる面積は半分ぐらいになりました。しかし、運営状況次第で当初の形態に近い空間がつけられるような増殖可能な建築の骨格を考え、アルゴリズムックデザインによる木造アーチ形式にしました。かなり迷われるユニークなアイデアを思いつくクライアントなので、今後もさまよいながら進んでいくであろうプロジェクトです。

最後は建築を作っている建築家もさまよっているの、そういうところを最後の5枚目では紹介したいと思います。

で非常勤などをして大学の教育機関でもさまよいながら学びを得て建築を生み出し今に至ります。



前田圭介

第13回建築コンクール さまよう建築

1974 広島県福山市生まれ
1998 国土大学工学部建築学科卒業
工務店で現場監督として5年間
建築のものづくりに携わる
2003- UID 設立
2007-2010 穴吹専門学校 非常勤講師
2011-2017 広島工業大学 非常勤講師
2013-2018 福山市立大学 非常勤講師
2014-2016 名古屋工業大学 非常勤講師
2014-2017 アジア建築家評議会若手建築家委員
神戸芸術工科大学非常勤講師
2017 福山駅前再生協議会委員
2017-2018 広島大学 客員准教授
2018- 広島工業大学 教授
早稲田大学芸術学校非常勤講師
2020- 島根大学非常勤講師
2022.03- 広島工業大学 教授退官
2022.04- 近畿大学工学部教授 就任



もう一つは福山市に対して建築を通してどう関わることかというのをライフワークとしてやっています。右下にスケッチがあるのですが、福山駅というのは、お堀を埋め立てられて出来ていますので、駅からお堀が見えるという意味ではすごくユニークな場所です。で

私自身、福山市生まれで福山市が大好きです。でも、昔から別に大好きなわけじゃなくて、大学時代東京に住んでいて、地元の良さとかそういうものは一度離れることによって見えてくるものがかなりあります。それで福山市に戻りました。もともと設計をやりたいかたのですが、建築家の事務所に入れなかったのも、ものづくりに関わりたいということで、工務店で5年ほど現場監督をやっていました。小さな工務店で、土木もメインでやっていたので土木建築ですね。そういう両面からいろんな仕事に従事していました。なので、少々の鉄筋を組んだりとか、丸ノコで型枠を切ったりとか、コンクリートも一緒に打設したりとか、土を一輪車で運んだりとか、いろんなことをその時に経験しました。もちろん積算とかもですね。すごく地味な仕事なんですけど、建築の基礎的な部分を、さまよいながら学んだ5年間でした。

同時に一流の厳しい職人さんからもかなり教わったりしました。そういった方々は工夫力があって、学びがたくさんありました。そういう職人さんとはいまだに繋がりがあって、困った時にはいろいろ相談するんですが、今の自分が作る建築のベースになった期間です。

2003年に事務所を立ち上げて、その後いろいろな大学

ですが、駅前はどこにでもある大きな都市の駅前となっています。その場所を掘れば昔のお堀の位置が分かるので歴史のレイヤーで重ね合わせながら、福山ならではの魅力的な駅前にできるといいなと思います。

尾関 最後は前田さん自身がさまよっているということですか？

前田 そうですね。どうさまよっているかを振り返ってみようかなと思いました。大きな都市のことは語れないですけど、自分の生まれ育った街を拠点に根を張ってやっていますので、やっぱり福山市ってところで建築を通して何ができるかというのは常に考えています。いろんな場所で仕事させていただくのですが、いつも自分の街で何かできるか、それは東京で仕事をしても、これは福山でもできるんじゃないかとか、そういったフィードバックを考えながら仕事をしています。なかなかすぐには実現に結びつかないんですが、福山市民の意識の高い人たちの中の動きからまちの魅力が出て来るんじゃないかなと考えています。

尾関 atelier-bisque doll(アトリエ・ビスクドール)の場所はどちらですか？

前田 大阪ですね。

尾関 前田さんの建築の中で、外と内の境界についてのお

話がありますが、例えば都市部の場合とそれ以外の場合とで意識は変わりますか？

前田 あまり変わらないですね。3年前ぐらい前に浅草の浅草寺の裏の方で、「茶室 ryokan asakusa」という旅館を設計したんですが、敷地がかなりタイトなのと、東京都条例など、なかなか条件が厳しいということを感じましたが、やはりその中でどのように気持ちいい場所、空間を作るのか？という意味ではあまり変わらないです。

尾関 お施主さんはいろんなタイプがいて、簡単に収束して行く方と、さまよう方といますが、河野さんはどのように



仕事を進められていますか？

河野 最初にお施主さんの思い描くものや欲しいものを引き出すというようなことをしてから、それにあった提案をいつもするようにはしています。お施主さんによっては私たちが思いもよらなかったようなアウトプットがあったりします。それを楽しみながら設計に繋げることがあったりします。でもやっぱり私たちも今まで設計をしてきた中で、そうじゃない方がいいと思う部分は良い方向にまとめて行ったりということは、状況によって行っています。

尾関 ケンメイさんは社員の方々と何かプロジェクトを行う際に、どのように収束して行くんですか？

ナガオカ うちの場合はほとんどクライアントはいないので、自分たちのやりたいことをやっていくわけですが、強いて言えば街とか地域というものを相手にしていきます。

尾関 クライアントを想定するという事はあるのですか？

ナガオカ あまりないですね。逆に、自分たち建築関係じゃない人間からしたら、街に何か自分たちのものを作ろうとした時に、こういう建築家がいてくれたらいいなと思います。自分たちはまちのためになるものを作るんですけど、その時にこういう建築家がいてくれたらうまくいくのになんていうのはやっぱり感じています。その建築家の方と巡り合うのが非常に難しいと感じますね。

尾関 ケンメイさんがクライアントですね。

ナガオカ ほぼ自分のやりたいことやっているので。

尾関 お施主さんとの関係は、常にジャストフィットなのかだんだん育っていくものなののでしょうか？河野さんいかがですか？

河野 私たちのやっていることに関して言うと、すごく変わったことをやっていると思うんですね。すごくニッチなことやっているとと思うので。誰しもにとっていいとは思ってはいないです。私たちのホームページでも参加型リノベーションに興味がない人は連絡がこないだろう。という形になっています。

ナガオカ 昔は大きな建築を行政なり、国や県が建築家に依頼するみたいなやり方だったんですけど、施主と建築家の関係性がだんだん時代と共に変化してきて、先ほどの温室ミュージアムみたいに、施主自身が迷われるみたいに、迷いたいとなってきた。建築家もそれに付き合ってくれるようなそういう関係性をだんだん社会は望んできているんじゃないですかね。

尾関 温室は長くやっているんですか？

前田 やっていますね。ちょっと電話かかってくるとドキッとします。

先程ナガオカさんが仰ったように、これからのお施主さんは“こんなのがやりたいんだよ”みたいなのが色々あって、そこで最適なアドバイスをしながら。最初の敷地はやっぱりかなりコストがかかる場所なんです。そこしかないんだから、どういう風に作るかみたいなどころから、施主はまた違うところ探してきて、もっと作りやすいんじゃないかとか。なので、ある意味、自分がさまよわせていたり、今度は施主がさまよっていたり、自律・他律的な中で、モノができていくのかなという風感じます。

尾関 さまよいが許容されるというか、そういう社会っていうのが許容される社会になってきたという事ですかね。

前田 建築はやりたいことが明確な部分があったりなかった

りはするんですが、興味のある人が増えてきて、そういったニュアンスも含めて、この人だったらみたいな方が出始めていたり、地域にそういう建築家が増えてくると、少し前の時代の建築ではないあり方が出てくるのかなと思います。

尾関 ケンメイさんのお店の商品のラインナップとかは自分の好みとかで決めているのですか？

ナガオカ いやいや。その土地に長く続いているものを紹介しているので。知多半島だったら知多半島で長く続いているものですね。なので僕は施主でもあり、できれば自分で空間を作りたい人なので、そういう意味では先ほどの話に戻っちゃうんですけど、“こういう建築家がいたらいいな”って、それを思うと昔のような巨匠建築家じゃなくて、もうちょっとお2人のような柔軟性のある、それでいて、その土地らしさ、その土地に長く続くってことに関しても関心のある建築家と出会いたいというのが本当にあります。

今回、昔からの工場をリノベーションしたんですけど、失礼かもしれないんですけど、僕から見ると建築の人ってやっぱり建築然としたものを作りたいので。そうじゃなくて、ここはもっと手を抜いて欲しいのっていうニュアンスがやっぱり伝わりづらいんだなって思うと、どうやってそういう人たちを選んでいったらいいかなっていうのは、施主側にとってはすごく大きなテーマです。そこがうまく合致すればいいですね。

代表作を見て建築家を選ぶ時代ではなくなって、その建築家の感性なり考え方を、建築以前の、それこそ“さまざま状態の思考”みたいなもので、選ばせてもらいたい

というのがあります。

前田 そういうのって、どんな断片的なもので理解がしやすいですか？写真とか言葉という、硬い言葉を書きがちになるところで。

ナガオカ やっぱお2人みたいな。ある程度自分がある程度さらけ出していただかないと。あー輪車で土も運んでくれるんだ。とか。そういうのって、建築の素晴らしい作品としての見え方と、また別で、どうやって自分と同じ時間を共有してくれるんだろう？というような。そういうのがあります。

前田 ちょっとその辺りのホームページを変えようかなと(笑)。確かに伝わりにくいんですね。

尾関 写真載せてればいいってわけでもないんですね。さまざまを求めている人が多いんですね。

ナガオカ 今回もすごくいいテーマだと思いました。やっぱさまざまって建築の世界にも、僕の本業であるデザインの業界でもあるんですけど、時間っていう制約の中でいかに予算と時間を使うかっていうのが、今までの経済中心の社会だったんですけど、それがだんだんなくなってきた時に、建築家やデザイナーはその自由な時間の中で施主と濃密に付き合うかっていうやり方をちゃんと持ってないとだめなんじゃないかな。

尾関 本当に深い。いろんな可能性を感じる、3人の方々の発表だったと思います。ありがとうございました。



第13回 建築コンクール 公開審査・受賞作品

今はなき銭湯を弔い、今を生きる銭湯を寿ぐ、銭湯のための祭りを。

令和三年度 銭湯山車巡行

原景を迎え、地域コミュニティとともに解体された銭湯から記憶のよすがとして集められた記録や物品、それらを再構築し移動式の山車として組み上げたのが「銭湯山車」である。銭湯の銭湯文化を建築や彫刻も含めて色濃く再現した「銭湯山車」はまちの中をさまよいるが、現役の銭湯にエールを送り、かつて銭湯があった場所を訪れ、まちを巡行する。その行為はお披露目であり、祝いであり、弔いであり、鎮魂である。「祭り」というかたちを借りてさまざま銭湯山車を巡行してきたコミュニティを顕在化し、人々の偶発的な出会いを生み出す。銭湯の記憶を弔うための儀式としての「山車」巡行。現役銭湯主たちの期待、町をさまよるなかで多くの思いが注入され、ただの「山車」へと昇華する。

BACKGROUND

- 2011 〇 解体記録
- 2012 〇 文京区銭湯11軒巡回
- 2013 〇 およめ湯 復興・調査
- 2014 〇 月形湯 復興・調査
- 2015 〇 東区銭湯11軒巡回
- 2016 〇 銭湯山車巡行 プロジェクト発表
- 2017 〇 銭湯山車巡行 開催
- 2018 〇 文京区銭湯11軒巡回
- 2019 〇 銭湯山車巡行 開催
- 2020 〇 銭湯山車巡行 開催
- 2021 〇 令和三年度 銭湯山車巡行 開催

CONSTRUCTION

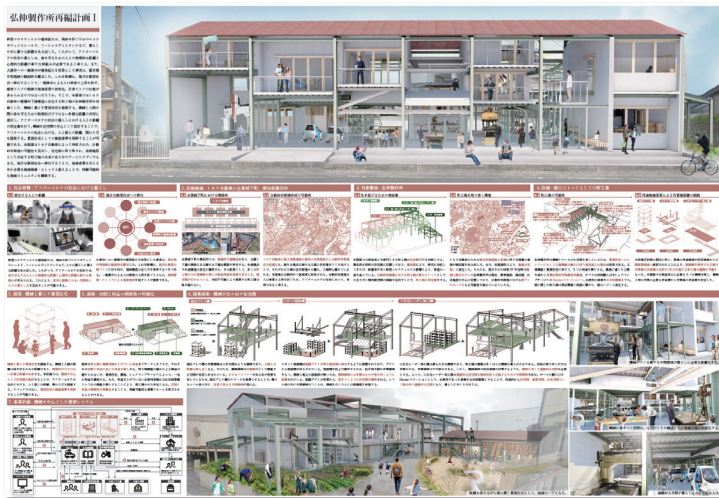
ROUTES

DAY1 2023.11.11 神田区-有明
DAY2 2023.11.12 神田区-有明
DAY3 2023.11.13 神田区-有明

最優秀賞 銭湯山車巡行

BKY + 銭湯山車巡行部 栗生はるか、三文字昌也、内海皓平、村田勇氣

解体された銭湯の記録や物品。これらは再構築され「銭湯山車」へと姿を変えた。銭湯山車は現役の銭湯にエールを送り、かつて銭湯があった場所を訪れ、まちを巡行する。この行為はお披露目であり、祝いであり、弔いであり、鎮魂である。巡行し、さまざま「銭湯山車」には、まちの多くの思いが注入され魂の入った真の「山車」へと昇華する。その年の巡行が終るとパズルのように分解され、まちの各所に埋め込まれ、再び組み立てられる次の巡行を待つ。この一連の行為は、廃業・地域コミュニティの解体という終わりを、抗いつつも受け入れつつ、銭湯の記憶を呼び起こさせる新しい「祭り」であり、まさに「さまざま建築」である。



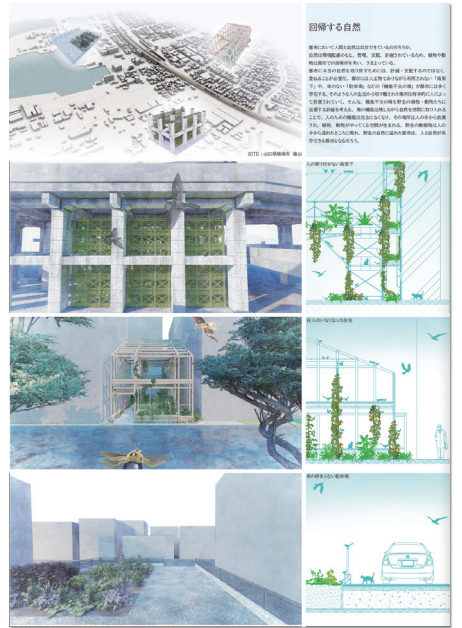
優秀賞 弘伸製作所再編計画 I
板倉 知也

階層の下請構造に存在する町工場は、生き延びるための増改築を行い、さまよいながら時代に対応してきたが、後継者不足とコロナ禍の影響により、衰退の一途を辿っている。この地場産業を支える中小企業の工場を「機械と暮らす賃貸住宅」として提案している。点在する町工場のケーススタディでもある。地方分散型社会へ移行するうえで、地場産業を支える中小企業を地域資源・ストックと捉えることで、持続可能な地域コミュニティを構築している。



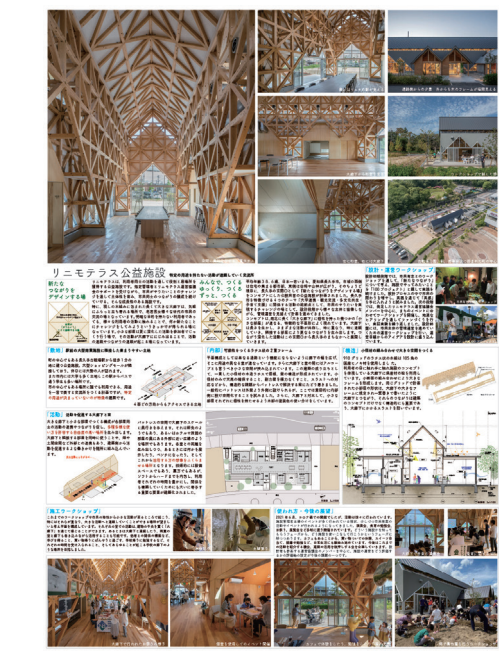
前田賞 回転する壁をもつ鳥の住宅
一級建築士事務所 LoHA (山田 寛)

巣ごもりというプライベート性とコミュニケートしあうパブリック性を兼ね備えた「鳥小屋」という既成概念を打ち砕く、材料費500円の「鳥の住宅」。毎年メンテナンスを行い今なお健在。鳥が利用しているかは書かれていない。壁の扉が回転することでメリハリのある生活を提供している。



ナガオカ賞 回帰する自然
髙島 凌、岸 宥佑、羽場 航希

植物や動物は都市で居場所を失い、さまよっている。都市には人工物ながら未利用の「機能不全の場」が存在する。この「機能不全の場」を、自然に委ね、野生の植物・動物たちに還元する計画。無責任な方法で建築がゴミをつくり出しているなら、それに対して向き合う1つのきっかけになるのではないかな。かなり無責任ではありながらも。



優秀賞 リノモテラス公益施設
～新たなつながりをデザインする場～

東畑建築事務所+ナノメートルアーキテクチャー

日本一若いまちに建つこの新築の公共施設は交流所であり「特定の用途を持たない」。地道な設計・運営ワークショップから、運営目線のアイデアを設計に盛り込み、各部屋をつなぐ大廊下が、多種多様な使い方「さまよい」を促し、許容する自由度の高い活動の手助けとなっている。施工ワークショップなどを通じて施設にかかわる人を増やす工夫もされており「みんなで作る、ゆっくりつくる、ずっとつくる」新しいつながりをデザインする場として、今後の展望にも期待したい。



優秀賞 流転する場所の記憶
shirokuma and company 中家 拓郎

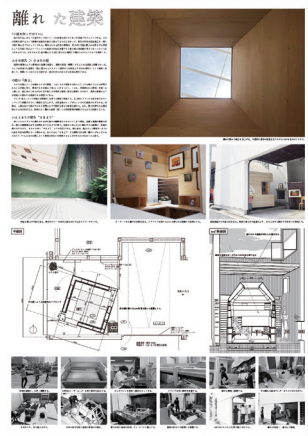
物の「終わり方」をデザインした作品。街の記憶を残すには、どんどん小さくなっていく建材のパーツみたいなものはあってもいいか。再利用できる家具、部材をレスキューし、建て替え後の店舗に引き継ぎ、使い切れないものは別のお店や一般の方へバトパス。記憶や物語を内包した街の部材が、さまよい、街に残り、あるいは街の外に出て、その街の一部になっていく。時間と物語が同時に伝わっていく象徴的な作品。



河野賞 Lighthouse in Living Nature
安倍 直人

自然という言葉がただの形骸化した言葉になっていないか? 林業家の傍ら空間設計や家具製作を行う作者が「生の自然」と建材として「作られたモノ」が共存する源流へと導く「灯台」のような作品

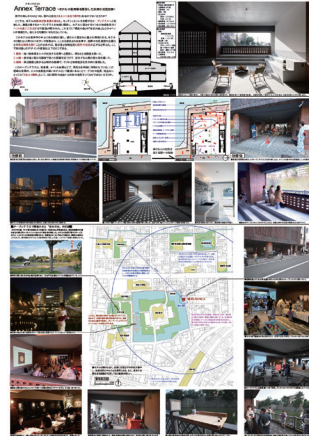
佳作



離れた建築

関 健太

母屋の傍らにありながら、まちのそばに"さまよう"ような存在で、茶室を想像させる小屋。限られた予算・スペースという"ギリギリ"の状態は、さまよいを生み、さまよいながらも楽しく制作する様子が、幸せの空気が伝わる。同時に非常に丁寧に作られている。



Annex Terrace

清水 隆之

福井城のお堀に突き出た空間を、オープンテラスとして解放した水辺の交流空間。観光拠点として好立地この場所に、必要な機能を整備し、「朝食の会」や「浴衣の会」などのイベントが開催されている。宿泊者・地域住民・他の観光客が"さまよって"出会う偶然"という旅行の楽しさを創出している。



House OS 3つ屋根の下

I-1 Architects (神谷勇机 + 石川翔一)

法規上分けられた、3つの土地に立つ3つの建物は、ごく狭いスキマを挟んで1つのボリュームとして存在する。温室と農業用倉庫に囲まれて存在する住宅は、農業(農地)と住宅(宅地)という"架空の"境界線を飛び越え、生活が派生し、さまよう建築が作り上げられている。



オキザリモノ

真鍋 美和子

人間が説明できないこと、人間の力ではどうにもならないこと、人間の仕業じゃないものを、建築的観点から見るとヒントが凝縮されているように感じる作品。



後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、(公社)愛知建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会、(株)中部経済新聞社

協賛企業



公開審査 総括

ナガオカ まさにさまよったプランがいっぱい出たと思いますし、審査員も大いにさまよったと思うので、さまよい大満足でした。受賞した皆さん、本当におめでとうございます。

ありがとうございました。

河野 受賞された皆様、本当におめでとうございます。すごく楽しい時間をありがとうございました。受賞されなかった皆様の作品の中にも素晴らしい、素敵なプロジェクトがたくさんありました。こういった時間をくださって本当にありがとうございました。

前田 受賞された皆様おめでとうございます。さまよう建築に対して非常に幅広く、また、審査員の特徴など考慮しながら応募された作品があり、興味深いと思いました。最終的に絞られてくると、審査員の多角的な言葉で、私たちもさまよいました。さまよるとかねっこいとか、どこかで共有する言葉なのだろうけれども、その言葉に対して今回応募された作品は非常に的を射ているものが多く、有意義な時間をすごさせていただきました。一日ありがとうございました。

公益社団法人
愛知建築士会 名古屋北支部

製作・発行

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部
第13回建築コンクール「さまよう建築」2023年 1月発行

<https://www.asa758kita.jp/>

<https://kenchiku-concours-758n.org/>